対人援助職者のポジティブ・ネガティブ職業生活出来事に対する社会的共有行動の対象者に関する予備的検討

○森本寛訓¹・瀧川真也²・黒田裕子¹ (非会員)・稲田正文²・長田久雄³

(¹川崎医療短期大学・²川崎医療福祉大学・³桜美林大学)

キーワード: 対人援助職者, ポジティブ・ネガティブ職業生活出来事, 社会的共有行動

Whom do human care service professionals share positive or negative work life events with?

Hiromichi MORIMOTO¹, Shinya TAKIGAWA², Yuko KURODA^{1, #}, Masafumi INADA² and Hisao OSADA³

(¹Kawasaki College of Allied Health Professions, ²Kawasaki University of Medical Welfare, ³J.F.Oberlin University)

Key Words: human care service professionals, positive or negative work life events, social sharing behavior

目 的

森本・神田・長田 (2011) は対人援助職者のメンタルヘルスの良好な状態と不調状態をそれぞれポジティブ感情とネガティブ感情で捉え, 各々と正の相関関係にあるポジティブ職業生活出来事 (以下 PWLE とする) とネガティブ職業生活出来事 (以下 NWLE とする) が“職員間の関係”と“職場での役割”の2因子で構成されることを明らかにした。現在は PWLE と NWLE に対する社会的共有行動に着目して研究を進めている。社会的共有行動は自身の感情が揺さぶられる出来事を体験したときに, その体験を周囲の人々と共有する行為のことであり, ポジティブ感情を増幅し, ネガティブ感情を緩和して, メンタルヘルス保持に貢献するとされる。PWLE と NWLE への対人援助職者の社会的共有行動が具体化されれば, 社会的共有行動の観点から対人援助職者のメンタルヘルスを不調な状態ではなく良好な状態で保持する手法が開発されと考える。森本・瀧川・黒田・稲田 (2014) は対人援助職者の社会的共有行動を, PWLE と NWLE を伝える開示行動と, それらの開示行動を受ける応答行動に分けて調査し, 対人援助職者が最も高頻度で開示もしくは応答していた PWLE と NWLE の内容を報告した。本研究ではこれらの PWLE, NWLE に対する開示, 応答行動の“対象者”を示し, その傾向を報告する。

方 法

調査対象者

本研究では対人援助職者として岡山県内の病院, 施設に従事する看護師 51 人, 介護福祉士 49 人, 保育士 57 人, 合計 157 人を調査対象者とした。調査対象者の平均年齢 (年齢幅) は看護師 33 歳 (22—51 歳), 介護福祉士 36 歳 (21—70 歳), 保育士¹ 38 歳 (20—71 歳) であった。調査対象者の性別人数は, 看護師は男性 5 人, 女性 46 人, 介護福祉士は男性 13 人, 女性 36 人, 保育士² は男性 1 人, 女性 55 人であった。

調査手続き

本調査は 2014 年 8 月から 9 月にかけて質問紙法によって行われた。調査前には研究内容について川崎医療短期大学倫理

委員会の審査を受け, 承認を得た。また事前に調査対象者が従事する各施設管理者に対して調査の説明を行い, 調査の実施について同意を得た。さらに個々の調査対象者には調査票の表紙で調査の説明を行い, 調査への参加について同意を得た。調査票の配布と回収は各施設管理者の協力を得て行った。

調査内容

森本他 (2011) が作成した PWLE または NWLE 項目の中から職場スタッフに開示または応答したことのある最も印象的な項目の一つを選び, その項目が示す出来事を開示または応答した対象者を“上司”, “同僚”, “部下”から選択させた。

結果と考察

まず最も高頻度で開示されていた PWLE は, 特に“同僚”に対して開示され, 次いで“上司”, “部下”の順で開示される傾向が認められた。また最も高頻度で開示されていた NWLE は, “同僚”と“上司”を中心に開示され, “部下”へは開示が少なくなる傾向が認められた。

次に最も高頻度で応答されていた PWLE は, 特に“同僚”に対して応答され, 次いで“上司”と“部下”に対し同等に応答される傾向が認められた。また最も高頻度で応答されていた NWLE は, 主に“同僚”に対して応答され, 次いで“部下”, “上司”に対し順に応答される傾向が認められた。

これらの結果を整理すると, PWLE は開示, 応答行動ともに“同僚”が主の対象であるが, “上司”と“部下”を対象にしても行われていた。一方 NWLE は, 開示行動は主に“同僚”と“上司”を対象に行われ, 応答行動は“同僚”と“部下”を主の対象として行われていた。以上より, PWLE と NWLE では開示, 応答行動の対象者の傾向が異なると推察された。

引用文献

森本 寛訓・神田 有希恵・長田 久雄 (2011). 対人援助職者の感情状態と関連する職業生活出来事の検討 ヒューマン・ケア研究, 12, 35-51.

森本 寛訓・瀧川 真也・黒田 裕子・稲田 正文 (2014). 対人援助職者のポジティブ・ネガティブ職業生活出来事に対する社会的共有行動の内容に関する予備的検討 岡山心理学会第 62 回大会発表論文集, 7-8.

本研究は JSPS 科研費 26380979 の助成を受けたものです。

¹ 保育士の調査対象者のうち年齢不明者が 3 人いたので, 残り 54 人のデータから平均年齢 (年齢幅) を求めた。

² 保育士の調査対象者のうち性別不明者が 1 名いた。